

## 1 国語科における学び続ける子供とは

国語科における学び続ける子供とは、言葉による見方・考え方を働かせながら、言語内容と言語形式との関係を明確にしていく中で、高まった言語能力を次の学びや日常生活に主体的に活用していく子供である。

### (1) 「言葉による見方・考え方を働かせる」とは

「言葉による見方・考え方を働かせる」とは、教材や日常生活の中で出会う言葉や、表現しようとする言葉について、意味や働き、使い方等の観点に着目して捉えたり、本当にその言葉の意味や働き、使い方等が適切かを捉え直して吟味したりすることを通して、言葉への自覚を高めることである。

第5学年「物語の全体像を捉え、感じたことを作者へ届けよう『たずねびと』」では、主人公が出合ったもの（物や人物）や心情を表す言葉に着目し、主人公の心情の変化について話し合った。話合いの中で、子供たちは主人公とおばあさんの会話の後の「恥ずかしくなって下を向いてしまった」という言葉に着目した。そして、主人公がそのような行動を取った理由である、「そんなことは考えたこともなかったからだ」という叙述の「そんなこと」という指示語が指し示す「この楠木アヤちゃんの夢やら希望やらが、あなたの夢や希望にもなって、かなうとええねえ」というおばあさんの言葉と真意について考えることで、主人公の心情に大きな変化が訪れたことを捉え、考えに自信を高めていった。このように、登場人物の行動や言葉の意味に着目し、最初は無自覚であった主人公の心情について捉え直す姿は、言葉への自覚を高める姿と言える。

### (2) 「言語内容と言語形式との関係を明確にしていく」とは

「言語内容」とは、文章や文、語句を読んだり聞いたりして受け取る、意味や感じ等の内容面のことであり、「言語形式」とは、文法や表現技法等の形式面や、その言葉を使う使い手の意図等のことである。「言語内容と言語形式との関係を明確にしていく」とは、「その内容を伝えるために、なぜその形式なのか」、「その形式を用いると、内容の伝わり方にどのような効果があるのか」を明確にしていくことである。

先の事例で、主人公の心情の捉えについて自信を高めていった子供たちは、「主人公が自分の心情の変化を自覚したきっかけは何だろう」という学習課題について話し合った。話合いでは、「『おばあさんの言葉』がきっかけだと思う。『この楠木アヤちゃんの夢やら希望やらが、あなたの夢や希望にもなって、かなうとええねえ』というおばあさんの言葉を聞いて心情の変化を自覚したから、主人公は下を向いてしまったんだ」という考えに全員が納得していた。一方で、A児は「きれいな川はきれいな川でしかなかった」という、「川の見え方」に着目した発言をした。周りの子供たちは、これまで着目したことの無い考えに触れたことでズレを感じ、「どうして川なの？」と、A児の考えの背景が知りたくなった。そこで、A児と同じ考えの子供が「主人公の心情が変化したから、川の見え方が大きく変わった」と発言したことで、川の描写に「主人公の心情」を感じさせる情景描写としての働きがあることに気付いた。それにより、自分たちの考えの背景には「下を向いてしまった」という主人公の行動描写の捉えがあるのに対し、「川の見え方」の考えの背景には情景描写の捉えがあることから、「注目している描写の違い」がズレの要因であることを理解した。そして、「川の情景には、主人公のどのような心情が込められているの？」という問いをつくり上げた。

問いに対して子供たちは、「夕日を受けて赤く光る水」「ゆったり流れる川」という川に関する二つの叙述を比較し、その効果や内容の伝わり方について吟味していった。そうすることで、「夕日を受けて赤く光る水」の描写に「原爆に関する情報やおばあさんの言葉を受けて、大きく変化した主人公の心情」を表していることを捉えた。それにより、「情景描写の変化」という解決のための視点に気付いた他の子供たちは、「川の情景には、戦争の悲惨さと平和の大切さを感じた主人公の心情が込められている。作者は、川の見え方を工夫させることで主人公の心情が変化したことに気付かせるように書いたんだ」と、考えを再構築していったのである。このように、川の描写に対する捉えを変化させていく姿が、内容面と形式面の関係を明確にしていく姿であると言える。

### (3) 「高まった言語能力を次の学びや日常生活に主体的に活用していく」とは

「言語能力」とは、言語で正確に理解し適切に表現する力、言語を手掛かりとしながら論理的に思考する力、豊かに想像する力等である。「言語能力」を高めるとは、これらの力について理解し、自覚的に活用できるようになっていくことである。また、「次の学びや日常生活に主体的に活用していく」とは、この言語能力を次の学習活動や、日常生活における言語と関わる場面で、進んで活用していくことである。

先の事例で、「情景描写の変化」の視点に気付き、叙述を捉え直した子供たちは、表現の効果に着目しながら作者の工夫や作品の特徴を捉えることができた。このように、これまで無自覚だったものに対して自覚的に関わろうとする姿が、主体的に活用する姿であると言える。

## 2 学び続ける子供を育てるには

### (1) 子供が必要感をもって学習対象と関わるために

#### ① 育成したい資質・能力、目的、相手を明確にした言語活動を設定する

子供は、言語活動の目的や相手が明確になると、学習対象に主体的に関わる。そこで教師は、言語活動を具体的に提示する。その際、育成したい資質・能力を明確にすることが重要である。そして、子供と共に「この学習に取り組むと、どのような言葉の力が身に付くか」、「学んだことを誰に伝えたいか」等を考えていく中で、目的や相手を明確にしていくようにする。

#### ② 自分の考えをつくり上げる場を工夫する

子供は、自分の考えに対して、根拠や背景が明確になると、友達に主体的に関わる。そこで、教師は子供の考えの根拠や背景を見とり、子供自身が根拠や背景を意識して考えをつくり上げられるようにする。そのために①考え方や読み方等を学ぶ場を設定する。②子供の考えや考え方、読み方のよさを認めたり価値付けたりする。

### (2) 子供が自ら問いをつくるために【重点】

#### ① 子供の考えが生かされる学習課題を設定する

子供は、自信をもった考えを生かす見通しがもてると、「伝えたい」、「友達の考えを聞いてみたい」という意欲が高まる。そこで教師は、学習課題を吟味して設定する。学習課題の条件は、①単元の本質に関わるもの②着目すべき言葉や場面、登場人物の心情等が明確なもの③子供のこれまでの考えや読みが生かされるものである。これらの条件を踏まえた学習課題が、子供にとって切実なものとなる。なお、学習課題は子供と共に作り上げる場合や、教師が子供の問題意識を見とって設定する場合がある。

#### ② 違う考えとの出会いにおける子供の反応を見とり、問題意識を共有できるようにする

子供は切実な学習課題に対して、既習や言葉による見方・考え方を駆使して考えをつくり上げ、伝え合う意欲を高めていく。教師は、子供がどの言葉に着目し、どのように捉えているのかを見とり、ズレが生じる場面を想定して授業を行う。子供は自分と違う考えに出合った時、「え?」「どうして?」「それは違うんじゃないの?」等の不安や疑問、反発等の問題意識をもつ。教師はこの問題意識が、「友達の考えをもっと聞きたい」「違う理由をもっと知りたい」という反応と捉えて立ち止まり、「どうしたの?」と問う等、問題意識をもった理由を明らかにし、全体で共有できるようにする。

#### ③ 考えることを焦点化し、ズレの要因を明らかにすることで問いをつくるようにする

問題意識が全体に共有されると、子供は問題意識を解消しようとする。そこで教師は、子供が考えの根拠や背景を伝え合う場を保障し、ズレを明確にする。その際、「どの叙述から考えたの?」「その言葉に対してどのように考えたの?」と問い返したり、音読や動作化で考えや読みを可視化したりして、考える言葉や場面を焦点化し、ズレの要因を明らかにしていく。その中で、友達の考えに納得し、ズレの要因から考えるよさを感じたり、自分の考えを見直したりしている子供の姿を見とり、「〇〇さんは、□□について考えようとしているよ」と広めたり、「みんなも□□については納得できる?」と全体に投げかけたりするなど、状況に応じて子供同士をつないでいくことで、子供が自ら問いをつくることができるようにする。

### (3) 子供が自ら問いを解決するために

#### ○ 互いの考えを論理的に理解にできるようにする

子供が自ら問いを解決するには、互いの考えを理解し、解決のための視点（問いを解決する上で有効な内容、視点、読み方等）を取り入れながら自らの考えを再構築していくことが重要である。そこで教師は、子供の考えの根拠や背景を視覚的に提示するなど共有化を図る。その際、別の言語形式との比較や言語形式の欠落との比較等により、その言語内容や言語形式がもつ効果や、言語内容と言語形式との関係を明らかにして、論理的に自分の考えを見直すことができるようにする。その中で、問いに対する最適解や納得解をつくり上げられるよう、論理性や妥当性を話し合い吟味する場を設定する。